（35）

氏名(生年月日)	小 豆 畑　博（オ ズ ハタ ヒロシ）
本　　籍	
学位の種類	医学博士
学位授与の番号	乙第787号
学位授与の日付	昭和61年11月21日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当（博士の学位論文提出者）
学位論文題目	**食道静脈瘤に対する内視鏡的硬化療法の臨床的研究**
論文審査委員	（主査）教授　羽生富士夫
	（副査）教授　小幡　裕，教授　丸山　勝一

論 文 内 容 の 要 旨

目的

食道静脈瘤に対する治療法は，従来，選択的シャント手術，直達手術などの観血的治療が中心であったが，近年侵襲の少ない治療法として，内視鏡的硬化療法が行われるようになった．しかし，硬化療法の適応についてはさまざまな意見があり，未だ解決されていない問題である．そこで，硬化療法が緊急症例に対する止血法として有用であるかどうか，また，硬化療法を待期予防的治療として行うことができるかどうかを知る目的で，硬化療法の治療成績を手術療法と比較検討した．

対象および方法

対象は，当科で治療した食道静脈瘤症例の硬化療法118例，手術療法30例である．硬化療法は，内視鏡を用いて5％ethanolamine oleateを静脈瘤内に注入する方法を行い，手術療法は直達手術を行った．

成績

緊急症例における硬化療法の止血率は，93％と高率で，手術療法の92％と同等であった．硬化療法の合併症は軽度なものが多く，合併症を原因に死亡したのは待期予防症例の1例だけであった．これに対し，手術療法の合併症は重篤になるものが多く，緊急症例5例，待期予防症例1例が死亡した．4年生存率についてみると，緊急症例では，硬化療法57％，手術療法33％と硬化療法の方が優れていた．また，待期予防症例では，硬化療法60％，手術療法57％とほぼ同等であったが，硬化療法症例には高度肝障害，肝癌合併，他疾患合併など手術適応のない症例も少なからず含まれているため，手術可能症例に限ってみると，4年生存率79％と手術療法より優れていた．治療後静脈瘤出血を4年累積出血率でみると，緊急症例では，硬化療法34％，手術療法0％と硬化療法に多く，待期予防症例では，硬化療法34％，手術療法32％と同程度であった．しかし，硬化療法で治療後静脈瘤出血を原因に死亡したのは1例だけであった．肝機能への影響をみると，硬化療法では術前後に変化はみられず，手術療法では術後にK_{ICG}の低下をみとめた．

考察および結論

硬化療法は，緊急症例に対する止血法として非常に優れており，緊急症例を硬化療法の適応としうると考えられた．また，待期予防症例については，合併症，生存率，肝機能への影響の点で，硬化療法の方法が手術療法より優れており，待期予防症例を硬化療法の適応としてよいと考えられた．

論文審査の要旨

本研究は，食道静脈瘤に対する内視鏡的硬化療法118例と，手術療法30例の臨床的対比を行い，止血率，合併症，生存率，出血率等から，硬化療法が，緊急症例に適応し得るのみならず，待期予防症例についても，手術療法と遜色ない成績であるとしたもので，臨床上，学術上，価値あるものと認める．

主論文公表誌

食道静脈瘤に対する内視鏡的硬化療法の臨床的研究
　東京女子医科大学雑誌　第56巻　第9号
　892～902頁（昭和61年9月25日発行）

副論文公表誌

1）術後高カロリー輸液施行中にみられた亜鉛欠乏症の1例
　日臨外会誌　43（8）929～933（1982）
2）内視鏡所見の変化よりみた食道静脈瘤硬化剤注入療法の評価
　Gastroenterol Endosc　26（9）1474～1480（1984）
3）総肝管が完全閉塞を来したMirizzi症候群の1例
　胆と膵　5（11）1587～1591（1984）
4）食道静脈瘤硬化剤注入療法の心肺機能に対する影響
　日消誌　82（3）391～397（1985）
5）乳癌における各種腫瘍マーカーの臨床的意義について
　外科　47（5）512～516（1985）
6）食道静脈瘤出血に対する内視鏡的硬化剤注入療法の検討
　日外科系連会誌　13 44～46（1985）
7）転位を伴った胆嚢捻転症の1例
　外科　48（4）424～426（1986）